

会員を訪ねて

— 釧路SOSネットワークの設立に貢献した藤田麗子氏の活動 —

荒木章裕¹⁾，松田ひとみ²⁾，宗婷³⁾，岡本紀子²⁾

¹⁾ 筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻

²⁾ 筑波大学医学医療系

³⁾ 筑波大学大学院人間総合科学研究科フロンティア医科学専攻

I. はじめに

過日、釧路市を中心に展開される認知症のために徘徊する高齢者を救済するシステムがNHKで放映されたのをご覧になっただろうか。釧路市は寒冷で厳しい生活環境下にあり、徘徊が死に直結しかねない状況であることを考えると、我々はその取り組みに対して大いに関心をもった。また番組では触れられなかったが、この仕組みには多くの人々の熱意と努力があったと推測された。現在では釧路モデルが活かされ、全国に同様のシステムが確立されつつあるが、その設立経緯を探り、「その人がおられたからこそ、その心があればこそ、成り立ったこと」を、多くの方々に紹介したいと考えた。

我々は逸る気持ちを抑えつつ、初秋の釧路に向かった。事前に釧路町役場での勤務経験もあり、現在は釧路市に在住の堀田厚子氏のご紹介により、「釧路SOSネットワーク」創設の基礎作りに関わってきた藤田麗子氏とお会いする運びとなった。藤田氏のプロフィールについては後述するが、現在訪問看護ステーション「縁」の所長であり、北星学園大学社会福祉学科や地元の看護専門学校の非常勤講師としてご活躍中である。

1) 藤田麗子氏の略歴のご紹介

特定非営利活動法人「縁」代表理事、兼、訪問看護ステーション「縁」所長としてご活躍中である。保健師・看護師免許の他に、精

神保健福祉士、介護支援専門員の資格を持ち、2009年には旭川医科大学大学院にて、若年認知症の人と男性介護者に焦点をあてた質的研究を行い、修士号を取得された。

看護の基礎教育、保健師過程を経て、地域行政・保健に関わる職務に専念された。滝川市、札幌市の保健師から始まり、昭和51年より道立釧路保健所に勤務し、母子保健、成人病保健活動、精神保健福祉事業に大きく携わる。在職中は、一つひとつの相談や訪問から地域全体を捉える活動スタイルを大切にしながら、地域に活動・貢献されていた。昭和59年より「釧路地区障害老人を支える会（たんぼぼの会）」の設立と運営に取り組み、黒子役で支援し続けることにより会は成長し、平成2年より「釧路SOSネットワーク」の設立へと発展した。転勤を経て、平成19年から釧路SOSネットワークの事務局長を担当し、平成21年に退職される。現在も地域の高齢者や家族一人ひとりのために、支援活動を継続されている。

2) 釧路SOSネットワークシステムについて

たんぼぼの会が提案し、保健所保健師が支援し構築した本システムであるが、行方不明者を速やかに搜索・保護し、必要なサービスを提供する地域内住民全員が参加者であり担当者になりうる画期的な取り組みである¹⁾。釧路市は全国、世界に先駆け、地区組織としての行方不明者搜索システムを構築した地域

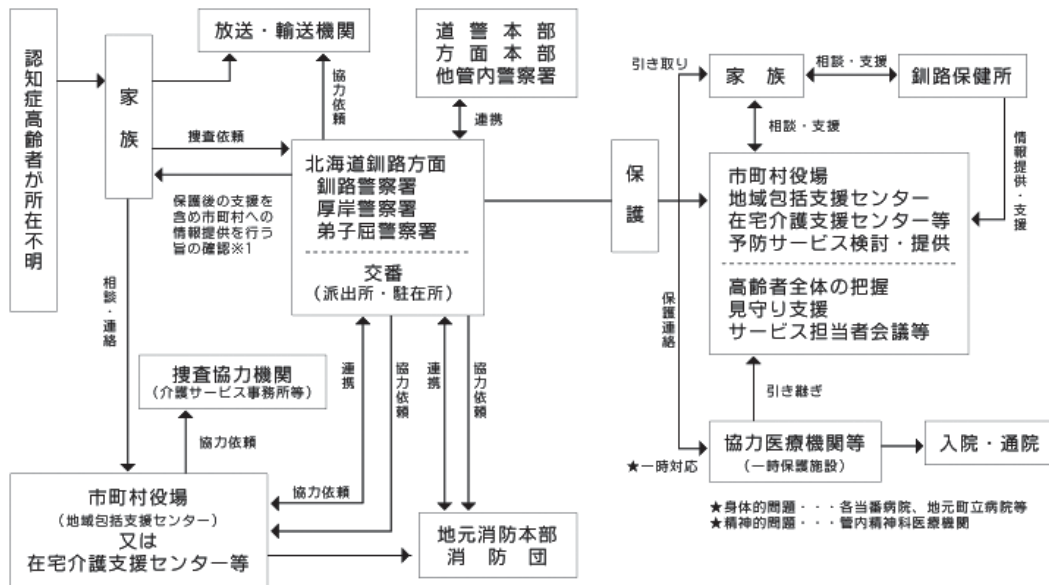


図1. 釧路地域 SOS ネットワークフローチャート
(NPO シルバー総合研究所、2014 より抜粋)

である（図1参照）²⁾。

行方不明者を地域で搜索するネットワークというのは、家族から警察に依頼があった時点で各協力機関（市町村、消防、FM局、タクシー会社など）に情報を提供し、地域が一体となって行方不明者を搜索・保護し、その後の必要なサービスを提供するまでの一連の流れを担う。また、家族が警察に電話をするだけで搜索活動が開始されるという、発覚から搜索開始までの所要時間が最短である特徴を併せ持つ。個人情報保護法については、釧路市の特例措置（釧路市行方不明者搜索活動に関する要綱）³⁾によって搜索届の提出や搜索人員といった制限を乗り越えることができ、搜索までの時間短縮と早期発見・保護が期待される。

II. ネットワーク設立の背景

まずは地域住民参加型のシステムの設立経緯をご紹介します。

1) 認知症高齢者を介護する家族会

釧路 SOS ネットワーク設立で中心となったのは、行政ではなく「釧路地区障害老人を支える会（たんぼぼの会）」である。この会は認知症高齢者を介護する家族会であり、学

びと憩いの場として機能している一方で、地域住民の代弁者として行政や機関に意見を述べる役割を持っている。

昭和56年、釧路保健所で保健師として活動していた藤田氏はある女性から一本の電話を受けた。その内容は、「認知症の家族を介護する人たちがみんな泣いている。『お父さん（要介護者）殺して私も死にたい』』と言っている人もいる。釧路に家族会を作りたい！」というものであった。電話の女性は認知症を持つ義母の介護をしており、行動・心理症状が悪化するたびに病院へ入退院を繰り返すことに強い介護負担を感じていた。その当時、京都や札幌に認知症患者家族会が設立されたという報道を聞き、女性は家族会を求めて市役所や社会福祉協議会など様々な機関に連絡していたという。

こうした住民の声を知った保健所は、地域保健活動の中で介護に困っている人たちの会を地区組織で作ろうと考えた。その頃道庁からも正式に老人精神保健事業の通知があり、まずは現状把握のため老人精神保健連絡会議を開催することとなった。報告内容は保健師による個別の相談や家庭訪問の紹介が主体であったが、次第に他職種や関係機関などにも広がるようになり、こうした積み重ねによっ

て電話の女性が感じていた負担は彼女だけのものではなかったことが明らかとなった。

この事実を周知する必要性を感じた精神保健協会は、シンポジウム「老いを考える集い」を開催することとなった。シンポジストとして電話の女性も迎えられ、認知症の家族介護の実態を参加者と共有する場となった。シンポジウム終了後、司会者から「家族会を必要としている声が上がっています。会を設立したいと言う方は会場に残って下さい。」という提案が上がり、その場に26名が残った。これは地域のニーズが高まっていることの証明であった。こうして昭和60年6月、会員34名の学びと憩いの場を目標に、『たんぽぽの会』が誕生した。

2) たんぽぽの会の活動支援

たんぽぽの会は、認知症家族を介護する当事者が中心となって組織された集団であった。藤田氏ら保健師は、精神保健活動に関わりがあった精神科の医師やソーシャルワーカーから、「行政が主導では、地区組織として自立することができないか。」という言葉を受け、つい援助したくなる気持ちを抑え、会員の自主性を促していった。こうして、住民の潜在的なニーズを把握し援助者の想いと一致させることで、会の活動はスタートした。

会は医療関係者や行政などの関係機関を巻き込みつつ、介護の大変さなどを生の声で地域に発信することで市民権を獲得していった。会が軌道に乗ってからも、藤田氏らは例会、役員会、総会などにも積極的に参加し、時には住民の代弁者となり、地区組織の育成支援のため、黒子として陰ながら支援を続けていった。こうした活動と共に、会は次第に町づくりの視点を持ち始めていった。

3) ネットワークの設立まで

認知症高齢者の行方不明事件は以前から問題視されていたが、平成2年に起きた会員家族の徘徊死をきっかけに、会から捜索体制を見直す必要性が提言された。その当時、行方不明者は「家出捜索人」として扱われ、事件・事故と比して優先度は低く、またプライバシー

保護の関係上その手続に手間を要するものの、捜索・発見までに長い時間がかかる仕組みであった。少しでも早く発見・保護するシステム構築のため、会員は行政や警察に対策や協力を要請したが、民間団体の働きかけだけでは地域を動かすに至らなかった。そこで会の設立から支えていた保健師に相談が持ちかけられた。

相談を受けた保健師は、会の代弁者として行政や機関などに働きかけたが、その提案は受け入れられず、平成4年に企画を中止することとなった。しかし、捜索システムの整備を求める声が止むことはなく、これが地域のニーズであると判断した保健師は、再び会と共に企画を進めていくことを決めた。「認知症高齢者は、家族だけではなく地域全体で見守っていく必要がある」という強い想いと、「釧路の広大な地形や冷涼な気候から、徘徊は命に関わる重大性と緊急性がある」という地域特性を強調し、行政や警察への働きかけを根気強く行っていた。

地域からの理解と協力を得るため、会と保健師は全国の先例を基に必要な協力機関のリストアップや、徘徊に関する資料の作成を行った。資料は保健所が開催する「老人精神保健事業連絡会議」で配布され、警察署や消防署、ハイヤー協会などの機関にも参加してもらい、たんぽぽの会から早期保護システム設立の提案が行われた。会議では更に、老人保健施設や特別養護老人ホーム、病院でも徘徊に苦慮している実情が明らかとなり、この問題に対して地域全体で取り組んでいく必要があると認識されることとなった。

関係機関と何度も協議を行っていった結果、たんぽぽの会・保健所・警察・消防・ハイヤー協会・精神神経科の医療機関・特別養護老人ホーム・市町村・デイサービスセンター・介護支援センター・社会福祉協議会・支庁などを含む31団体の協力を得て、平成6年4月に『障害・虚弱老人の保護に関する連絡会議(SOSネットワーク)』がスタートした。現在はFM局、テレビ局、訪問看護ステーション、JR、警備会社などを含む68団体(150機関)まで増加し、活発な連絡会議によって

システムの改善・調整が行われている。

Ⅲ. SOS ネットワークと保健師活動

1) アフターケアや予防策の検討

SOS ネットワークでは、行方不明者の早期発見・保護だけに留まらず、アフターケア、および予防活動を通して、認知症の高齢者やその家族が住みやすい環境づくりに取り組んでいる⁴⁾。この部分は主に保健師が担当する領域であり、事業と仕事を兼ね備えた活動であった。

①在宅ケア支援

介護保険制度が十分に整備される以前、たんぼの会から感染症を持った高齢者へのヘルパー派遣が拒否されたと相談があった。これには、福祉職全般が医学的な知識を学ぶ機会が乏しく、二次感染の対策ができていなかったという背景があった。それに対し、保健師らが「在宅ケアと感染予防の手引き」という書物を作成し、各所に配布することで具体的な対策方法を講じた結果、地方の図書館や他県からも本が欲しいという依頼があり、500部も配布したという。

上述した活動以外にも、搜索によって保護された高齢者の健康状態を確認し、必要であれば入院措置を図り、また自宅に戻った後も電話や訪問による家族の支援、介護保険やケアプラン見直しの提案など、高齢者だけでなく介護者の共倒れを防止するためのケアにも力を入れている。

②予防活動

行方不明の予防活動として、SOS ネットワークでは自宅・近隣（一次）、町（二次）、広域（三次）の3段階に区分し、それぞれに合わせた健康教育を実施している。

SOS ネットワークの活動を地域住民に認知してもらうためには、まず認知症を理解してもらう必要があった。そのための啓発活動として、SOS ネットワーク研修会やグループホーム協会主催で、介護劇「キノコバーちゃんどこ行くの」をこれまで3回上演した。この劇は道に迷った認知症高齢者を住民が力

を合わせて保護するまでの内容で、認知症高齢者を発見した際にこういった対応をとればよいかを示したものであった。シナリオは自主作成し、監督、配役もすべてSOS ネットワークの関係者で構成されていた。これは地元メディアなどでも取り上げられ、釧路市内にネットワークの活動内容が理解される大きなきっかけとなった。

2) 連絡会議での印象的な事例

不明者の行動範囲や事例は広範にわたり、その都度組織の連携や調整が必要不可欠である。そのため、協力機関や団体で事例報告などの連絡会議を行い、各々の役割認識を促すことで、ネットワーク全体のシステム改善・調整を図る必要があった。

藤田氏は興味深い一例を示して下さったので、それを紹介する。ある連絡会議内で、実際に認知症高齢者を保護した一例の紹介があった。発見者はタクシー運転手の男性、保護されたのは女性の高齢者であった。その女性は発見時和服に身を包んでいるが、手に草履を持ち、足は泥だらけの素足であったという。何か様子がおかしいと感じた運転手は乗車を促し、「どこから来たの？」と問いかけるが支離滅裂な返答しか得られなかった。ふと思い立ちFM 釧路を選局してみると、まさに目の前にいる女性が行方不明になったと放送されており、事情を理解した運転手はそのまま警察に送り届けた。この一連の流れを発見者本人が紹介していたが、彼は「初めは、人前で話すことは苦手と拒否したが、社長から『貴方が発見したのだから、自信をもって行政に発表してきなさい』と命令されたから来ました」と、緊張で声を震わせながら報告していたのだという。この姿が非常に嬉しくて印象的であったと藤田氏は述べている。

Ⅳ. 終わりに

SOS ネットワークは、自宅で認知症を介護する家族や藤田氏をはじめとする保健師、行政機関や企業、そしてネットワークの要である地域住民によって支えられている。認知症の高齢者数が増加する中、このシステムが

発展していくためには、我々が出会った人々の人間力に依るだけでなく、様々な課題への対策を講じていかなければならない。

課題のひとつを例示すると、協力者への補償が挙げられる。徘徊者を発見するのは、前述したようなタクシー運転手などのドライバーであることが多い。発見時には仕事を中断して捜索や保護に無償で協力するが、それに伴う業務収益への影響が考えられる。SOSネットワークの活動が命に関わるが故に声にはし難いが、発見者の業務収益等への影響の実態を明らかにし、補償の仕組みを整備する必要があると考えられる。このような円滑なシステム運用の維持や、システム構築に携わる人材の育成を期待せずにはいられない。

今回の訪問から、地域内の福祉、行政、市民のすべてが有機的に繋がりをもつことや、これらを繋ぐ存在の重要性を認識することができ、貴重な学びの場となった。

謝 辞

講演当日、藤田氏は札幌に赴いており北星大学での講義を終え、釧路まで駆けつけて下さいました。我々への講義は午後6時30分

から9時頃まで行われたものです。貴重な講義を行って下さいました藤田麗子氏に深く感謝申し上げます。

この度の紹介が、皆様の活動に活かされることを心より願っております。

参考資料

- 1) 釧路市総合振興局ホームページ. (<http://www.kushiro.pref.hokkaido.lg.jp/hk/hgc/0000top/3000topix/kodomo/002/sos.htm>) 2014年9月30日アクセス
- 2) NPO シルバー総合研究所：高齢者の見守り・SOSネットワークを築こう！～行方不明者ゼロを目指して～. ホームページ (<http://www.silver-soken.com/sos-net/html/case-kushiro.html>) 2014年9月30日アクセス
- 3) 釧路市行方不明者捜索活動に関する要綱. (http://www1.g-reiki.net/kushiro/reiki_honbun/r355RG00001016.html) 2014年9月30日アクセス
- 4) メジカルフレンド社. 健康地域の創造. 道立衛生学院保健婦科「あすなろ会」編著



公演の様子



公演参加者（高齢者ケアリング学研究会会員）

連絡先：荒木章裕

〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1 総合研究棟 D310 室
筑波大学大学院人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻

Tel：029-853-2984

E-mail：s1430379@u.tsukuba.ac.jp